

▶ロマンチックな星空の下、大自然のキャンプを楽しめます。(ほたか牧場キャンプ場)



## 小さくても輝く 尾瀬の郷

### 1. 片品村の概要

片品村は、群馬県の北東に位置し、村の総面積（391.76km<sup>2</sup>）の92%を森林が占めている自然豊かな村です。東京から関越自動車道沼田ICを利用して、車で約2時間半。村は観光業・農業を主要産業としており、高地を活かした高原野菜栽培が盛んです。尾瀬の自然豊かな大地と平成の名水百選に選ばれた水を使って栽培された「尾瀬トマト」は絶品です。春から秋にかけては、本州最大級の高層湿原「尾瀬ヶ原」の絶景を見ようと

全国各地から観光客が訪れます。

しかし冬は景色が一変し、一面の雪景色になります。片品村は関東で唯一、特別豪雪地帯に指定されている自治体で、非常に多くの降雪があります。この時期は村内に5カ所あるスキー場で極上のパウダースノーを堪能することができます。

### 2. 尾瀬国立公園

ラムサール条約湿地登録地でもある尾瀬は、日光国立公園の一部として指定をされていましたが、植生が栃木県の日光とは異なることから、「尾瀬国

かた しな むら  
群馬県 片品村



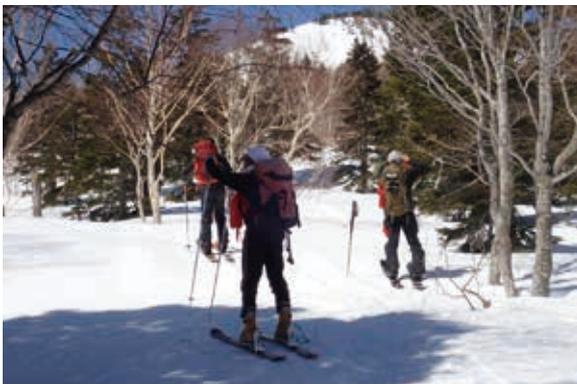
立公園」への実現に向けて活動が始まり、平成19年に日光国立公園と分割され、会津駒ヶ岳及び田代山・帝釈山等周辺地域を新たに加えて全国で29番目の国立公園として「尾瀬国立公園」が誕生しました。群馬県・福島県・新潟県・栃木県にまたがり、区域面積は372km<sup>2</sup>となり、1つの国立公園とし分離・独立したのは初めてのことでした。

尾瀬国立公園は西に本州最大の山地湿原である尾瀬ヶ原、東に火山堰止湖である尾瀬沼、さらにそれを取り囲む2、000m級の山々からなる山岳地域であります。自然の偉大な恵みが生んだ自然の宝庫である尾瀬。四季を通じてさまざまな花が咲き、代表的な花はなんとと言っても「夏が来れば思い出す」の歌詞で始まる「夏の思い出」に出てくるミズバショウです。夏にはニッコウキスゲが湿原を黄色く染めまします。秋には湿原一面が金色になり紅葉も大変きれいで、そのすばらしい風景には誰もが魅了されます。ここ数年は、ワタスゲの大群生が見られるようになり、白い穂がふわふわと風にゆれ、とても心が癒やされます。

また尾瀬は日本有数の豪雪地帯です。初冬の11月から5月の中旬ごろまで尾瀬ヶ原や尾瀬沼は深い雪におお

れ、半年以上が積雪期となります。幾度か尾瀬ヶ原を歩くと真っ白な雪におおわれた季節にも訪れたい気持ちになります。4月下旬から5月中旬にかけての残雪期がそのチャンスです。大型連休のGWの時期ということもあり、残雪の景色を求めて多くの登山者が尾瀬ヶ原に訪れ、白銀に輝く至仏山にはスキーヤー、スノーボーダーがやってきます。そのため、山での遭難防止として片品村遭難対策救助隊による登山ルートへの目印の設置作業が行われ、尾瀬ヶ原の一部の山小屋もGWから営業をスタートします。

片品村は自然の宝庫「尾瀬」への玄



▲登山ルートへの目印設置

関口です。これから令和4年尾瀬のハイカーシーズンが始まります。圧倒的なスケールと開放感を楽しみにぜひお越しください。

### 3. 尾瀬の郷 片品湧水群

村にある尾瀬の郷片品湧水群は優れた水質に加え、清掃、植林、山林保全、環境活動等、村民による長年の取組が評価され、平成20年に「平成の名水百選」として認定されました。村を囲む至仏山、武尊山、白根山等の山々に降った雪や雨が地下に浸透し、自然の中でろ過されたおいしい水です。

名水によっては湧水源が深い山林の中にあり、自然環境を守るといふ方針から立ち入ることができません。そこで村内の10カ所に取水設備を整え、おいしい水を求める人が利用しやすく整備を進めました。それぞれ1番近い水源から直接水を引いており、一部、地形的にどうしても難しい場合は、水道と同じ貯水池から給水しています（片品村では水道水に湧水を利用しています）。

10カ所の湧水はそれぞれ、①観音様の水②伊閑町の清水③武尊恵水④花咲の出水⑤武尊湧水⑥花の谷湧水⑦丸沼



▲村民の湧水清掃（観音様の水）

高原涼水⑧尾瀬岩鞍湧水⑨戸倉湧水⑩大清水湧水となっています（詳しくは片品村のHPに掲載されております）。「おいしい」と言われる水は感覚的な評価のほかに水質検査による裏付けがあります。水に含まれるカルシウムやマグネシウム等の量を相当する炭酸カルシウムに換算して数値で表したものを「硬度」と言います。例えば硬度が「0〜60mg/L」で軟水、「60〜120mg/L」で中程度の軟水、「120〜180mg/L」で硬水とされています。そして一般に硬度「10〜100mg/L」の範囲内の水がおいしい水とされていますが、片品村の湧水は「18〜55mg/L」で軟水です。

また溶液中の水素イオンの濃度を「PH」と言います。PH7が基準で中性、それ以下が酸性、以上がアルカリ性となっています。飲み水としての条件としては「PH6.5〜8.5」の範囲内が適正とされます。片品村の湧水のPHは「7.3〜8.2」。おいしさには根拠があります。ぜひ一度味わってみてください。

これからも豊かな自然を守り、この価値ある大切な水を守っていききたいと思えます。



▲道の駅前の湧水（花の谷湧水）

#### 4. 尾瀬ブランド制度

村では、尾瀬の郷・片品村らしい『うんめえもん、いいもん』（おいしいもの、良いもの）の商品の付加価値を高め、村内外へ情報発信することを目的として「尾瀬ブランド」制度を設けています。

この尾瀬ブランドは、『尾瀬国立公園』が誕生した際の記念事業として制度が始まりました。

1回目の認定は平成20年に行われ、認定期間を1期3年とし、現在は『第4次』となる尾瀬ブランド品が認定されています。また令和4年3月末で現行の第4次尾瀬ブランド品の認定期間が満了することに伴い、現在新たに認定が行われ、令和4年4月1日より第5次尾瀬ブランドとして再スタートします。

尾瀬ブランドの情報発信の1つとし

て、村主催や他自治体様が開催するイベントに参加させていただく際に、試食や販売等を行っています。

実際に目で見て、触れて（食べて）いただき、片品村にこんな商品があるのだと知っていただくとともに、なぜこの商品が片品村らしいのか、といったような説明を観光情報も混ぜて説明し、お客様と交流しながら、村と尾瀬ブランド、あるいは観光と尾瀬ブランドが結びつくように気を付けています。

例えば認定品のなかには『えごま』の商品があり、なぜ『えごま』が片品らしいのかと言うと、村では昔から『胡麻』と『里芋』は作ってはいけな、と言われていました。その理由は『日本武尊が芋殻で足を滑らせ、胡麻の殻で目を突き傷めた』という言い伝えがあるためです。そのため村内では胡麻と里芋を今でも作らず、胡麻のかわりに『えごま』が昔から育てられています。また、武尊山に建てられた日本武尊の像は、この言い伝えのとおり片目がありません。

そういったエピソードを交え、お客様も喜んでいただけますし、武尊山は日本百名山でもあるので、登山が好きな方も興味を持っていただけます。



尾瀬の郷・片品

▲『尾瀬ブランドマーク』尾瀬の代表花であるミズバショウをモチーフにしており、尾瀬ブランドの『O』、ブランドの『B』をイメージしています。



▲道の駅「尾瀬かたしな」空撮

#### 5. 観光交流連携拠点 道の駅尾瀬かたしな

やはり村の認定商品とはいえ、他自治体様においても同様の取組が行われており、それ単体では付加価値としては弱いと思われるので、前記のエピソードのような違う面からのアプローチやフォロワーも検討していかなければなりません。

片品村の産業は概要のとおり、高原野菜の栽培を中心とした農業と、尾瀬や日光白根山等の登山、スキーやスノーボード等のウィンタースポーツを

中心とした観光が主となっていますが、観光客数の減少傾向が続いており、雇用機会の減少、若者の流出による人口減少が課題となっています。

そこで、この課題に対応するため、「第3次片品村総合計画後期基本計画」において、村中心地に交流連携拠点エリア「尾瀬の郷駅」の整備構想が盛り込まれました。

村民の約4分の1にあたる1、200人のアンケートにより、特に農産物直売所やレストランの整備等を求める声が多かったことを踏まえつつ、有識者や多くの村民と打ち合わせを重ねて整備計画が策定され、「道の駅尾瀬かたしな」が平成30年7月21日にオープンしました。

村内産の高原野菜や加工食品、工芸品、土産品等を取り扱う農産物直売所「かたしな屋」では、昼夜の寒暖差によって生み出される質の高い高原野菜が人気で、トウモロコシは特におすす

めです。「かたしな食堂」では、片品村でつめっこ(すいとん)や、たらし焼き、おやきやうどん等のコナモノ料理が根付いていることや、村内の水が平成の名水百選に選定されていること等から、自家製麺の「尾瀬名水うどん」を

提供しているほか、村内の珍しいダムをモチーフにした「丸沼ダムカレー」等も提供しています。

また、他に例を見ない取組として、村民が週替わりで料理を提供する「村民キッチン」があり、キノコや山菜を活かした定食や、片品産トマト等を活かした石窯焼きピザを提供するなど、訪れるごとに違った片品ならではの味を楽しむことができます。

天然温泉を使った足湯があり、尾瀬アヤマ平等の稜線を眺めながらのんび



▲尾瀬名水うどん

りと浸れば日々の疲れを癒すことができるとお客様に大好評です。

最近ではワンちゃん連れのお客も増えていて、ことからドッグランを増設したほか、廃校からピアノを移設してストリートピアノとして設置し、冬季は豪雪を活かして雪の滑り台やかまくらを整備するなど、村と運営会社が一一致協力して、お客様に喜んでいただけるよう、魅力向上に取り組んでいます。

## 6. むらびくり

近年少子高齢化が社会問題となっていますが、他項でも申し上げたとおり、過疎化が進んでいる片品村にとっても人口減少は大きな課題となっています。

観光人口の減少もありますが、今まで村の観光資源は、多くの住民の方の協力により、守り維持することができました。これ以上の人口減少は、今まで当たり前であった資源の存続が危ぶまれることとなります。人口の減少を止めるのは容易なことではありません。

観光資源を持続可能にするためには何が必要か、また、いつまでにどんなことをやらなければならないのか等を明確にする必要があります。

片品村には魅力ある観光資源が豊富にあります。その資源をもう一度見直し、磨き上げることで、1つでは目立たないものでも他のものと結びつけば大きな輝きがあるものに変わることもあると思います。これから生活様式の変化によって来訪者のニーズがさらに多様化し、今まで以上に自然環境の多い地域への関心が高まると予想されます。

首都圏から2時間あまりという立地条件を活かして、高地の魅力である高原野菜と観光との連携を促進し、さらにカーボンニュートラルな社会に対応した観光地づくりに取り組んでいきたいと思えます。

コロナ禍で大変な時ではありませんが、なんとしてもこの難局を乗り越え、まいた種がやがて成長し、実となって、綺麗な花を咲かせられるようアフターコロナを見据え、村一丸となり頑張ります。ぜひ一度、片品村へ遊びに来てください。皆さまのご来村を心よりお待ちしております。

群馬県片品村 むらびくり観光課  
(令和4年5月23日付第3200号)



▲「美しい神津島の星空を子や孫の代まで残すこと」を目的とし、始まった取組により、東京都で初めて「星空保護区」に認定された

1. 神津島村の概要

「神津集り給いて詮議有りし島なれば神集島と名付け給えり」伊豆諸島創世を伝える三宅記にはこのように記されており、この「神集島」が神津島の名の由来とされています。

地理は、東京から178km、伊豆諸島のほぼ中央に位置し、面積18.58km<sup>2</sup>、周囲22kmで、村落は島の西側に集中する一島一村の島です。

東京湾竹芝桟橋から大型船で約12時間、高速船で約3時間45分です。また、調布飛行場から航空便は45分でアクセスできます。

島の中央には、花の百名山並びに新日本百名山の一座に名を連ねる天上山

この星空や自然・文化を「次世代に伝える」

— 星空保護区とエコツーリズム —  
保護しながら観光資源として活用する取組



▲多幸湾と天上山。天上山の裾野に広がる海岸は島民憩いの場所

こうづしまむら  
東京都 神津島村





▲海水浴客で賑わう赤崎遊歩道



▲一本釣り漁という漁法で釣られる「キンメダイ」は絶品

をはじめ、宮塚山、高処山、秩父山が座し、急峻で平地が少ない地形となっています。

島の人口は、昭和30年代の約2、800人をピークに、昭和45年には2、081人と、激減しました。平成2年には2、466人まで回復しましたが、その後徐々に減少し、令和4年8月1日現在1、794人となり、近年では横ばいの状況となっています。

島の主な産業は、農業・漁業・観光業であり、農業の主な換金作物はアシタバ・レザーファン・パッションフルーツ等ですが、さらなる農業の活性化をめざして新規就農者の育成や支援を行うとともに、島に適した新たな換金作物を模索しています。

漁業は、東京諸島で最も盛んに操業されており、伊勢エビ・海草類・赤イカ・金目鯛等、多種の漁獲物が市場に出荷されています。

観光業は、近年では4万人ほどの来島者数で推移しており、主な観光資源として、天上山や後述する星空、白い砂浜と透明度の高い海等があります。その中でも、一番人気は海を目的とした観光であり、来島者数の約半数がマリネリジャーの盛んになる夏季に集中しています。

## 2. 昭和40年代のオーバーツーリズムと夏季観光への依存

神津島の観光業は、昭和40年代の離

島ブームにより急激に伸び、島の経済・生活環境に大きな変化をもたらしました。最盛期には年間10万人の来島者数がありましたが、そのほとんどが夏季に集中していました。この頃は夏になると島内いたるところで人があふれ、宿に入りきらない客もあるほどでした。当時はそのような概念がなかったかもしれないですが、まさにオーバーツーリズムという言葉が相応しい状況でした。その後、全国での観光地化、さらには激安海外ツアー等の普及により、来島者は減少、前記したように近年では4・5万人ほどの来島者数で推移しています。月別来島者数をみると、7月から9月にかけて半数以上の方が来島しており、夏季の観光に大きく依存している現状は変わりません。

オーバーツーリズムが問題視される昨今、神津島における夏季来島者の受入状況は飽和状態に近く、来島者を増加させるためには、観光のあり方を改めざるを得なくなりました。

## 3. 新たな観光資源としての「星空保護区」

星空保護区とは、米国アリゾナ州に本部を有するNPO団体である国際ダークスカイ協会（IDA）が認定する光害の影響のない、暗く美しい夜空を保護・保存するための優れた取組をたたえる「ダークスカイプレイス・プログラム」の和名で、この認定地を総

称したものを星空保護区と言います。令和5年9月現在、国内では4地域が認定されています。

神津島では、平成29年より、NPO法人神津島観光協会が周年をとおして活用できる満天の星を「神津島まるごとプラネタリウム」と銘打ち、星空ガイド養成や星空観測会・星空観測ツアー等の事業に積極的に取り組んでいくこともあり、この認定に取り組むことになりました。

令和元年9月、IDA関係者の方にご来島いただき、島内関係者向けに説明会を開催しました。そこで「美しい神津島の星空を子や孫の代まで残すこと」とを目的とし、保護区認定をめざすこととなり、東京都が推進する東京宝



▲「神津島星空ガイド養成講座」は島民をはじめ14名が受講した



▲光害を防止し、美しい星空を保護するため、道路灯・防犯灯の交換工事を実施。民間企業と協力し、灯具開発から行った

島事業のサポートを受けながら動き出しました。

令和元年12月には、美しい星空を保護することを目的とし、「神津島星空公園条例」及び「神津島村の美しい星空を守る光害（ひかりがい）防止条例」を制定し、翌年1月より施行しました。

並行して、住民説明会を開催したのですが、星空保護区の認定を受けるには道路灯・防犯灯の形状・色温度がIDAの基準※をクリアするものに交換する必要があります。暗くなって安全性が保てないのではないかとという不安の声が多く聞こえました。

根気よく、説明を続け、理解をいただくことができました。

実際、道路灯・防犯灯交換後に、数カ所、暗くなったとのご意見をいただきましたが、その場所に灯具を追加することで対応し、安全性を保つことができます。

道路灯・防犯灯を交換するにあたり、大きな壁が立ちました。当時はIDAに基準合致する灯具がなく、その入手に頭を悩ませましたが、岩崎電気株式会社との協力により特注の道路灯・防犯灯を開発していただけることになり、令和2年4月より交換工事に着手することができました。同年7月には島内2/3の交換が完了し、8月にIDAに星空保護区への申請書を提出しました。そして12月1日星空保護区ダークスカイ・アイランドとして正式認定をいただきました。その後も星空ガイドの育成や星空観測会・星空観測ツアーを継続するとともに、地域住民への啓発活動として、講演会や特別事業を開催し、星空保護区の意味について理解を深めています。

星空は季節ごとにもその姿を変え、見る者を楽しませてくれます。特に神津島の観光散期である冬季は空気が澄み渡り、星空観測に最適な季節を迎えるため、通年の観光資源として最適です。

実際、観光業に携わる方々に話を聞くと、星空保護区認定後から、星空を目的にご来島くださる方が増えたといえました。星空保護区認定がコロナ禍であったため、数字での比較ができませんが、星空保護区認定をめざしたこの取組は、一定の成果を上げられていると感じ嬉しく思います。

今後も、星空保護区について積極的にPRを実施すべく、イベント等での



▲村・観光産業界・地域住民の努力が実り、令和2年12月に星空保護区ダークスカイ・アイランドとして正式認定を受けた(右)  
 ▲島民ガイドが行う星空観察ツアー(左)

周知を図るとともに、他の認定地域と連携も図っています。

※上方光束0%、色温度3000K以下

#### 4. 自然環境や歴史文化を守り伝える「エコツーリズム」

神津島では多様な自然環境と地域資源を活かした観光振興と環境保全活動に取り組み、神津島の豊かな自然と文化・伝統を次世代に引き継ぐエコツーリズムを推進することを目的に令和3年から神津島エコツーリズム推進協議会を立ち上げ、「神津島エコツーリズム推進全体構想」を作成しました。令和5年、この全体構想を主務大臣（環境、国土交通、農林水産、文部科学）へ提出し、9月1日に認定を受けることができました。

神津島には天上山や海・星空等の自然観光資源と、漁師町の営みが色濃く残る歴史文化等、とても魅力的な観光資源がありますが、これまではマリネジャーに頼っていた側面があります。今後は、この全体構想に基づき、自然を見せる観光から、自然を守る観光へシフトエンジニアシ、通年の観光資源として活用することを検討しています。

具体的には、天上山のさらなるPRや、村内の史跡等を巡るツアーの充実を検討しています。そのためには、第1にツアーガイドの育成が重要です。本村では、すでに、星空ガイドの育成



▲今後はエコツーリズムにも注力し、島の自然環境や歴史文化を次世代に引き継ぐことをめざしている



▲島内の神社で催される無形民俗文化財「神津島のかつお釣り行事」の様子。漁師の若衆が鯉の一本釣りの所作を演じてその年の豊漁を祈願する

実績があることから、このノウハウを活かしガイド養成を実施していきます。さらに、講演会や特別授業等を開催し学習する機会を設けて、特に児童生徒にエコツーリズムの概念を学んでいただき、それを根付かせることで、さらにエコツーリズムが浸透していくことを目標としています。それが、自然を守り次世代につなげることでありと考えます。

また、観光振興の観点では、この取組によって、通年観光が成立し、多くのツアーガイド等、観光事業者が専業で生計を立て暮らすことが最終目標です。

#### 5. その他特色のある取組 「離島留学制度」

都立神津高校は昭和47年に60名の入学生を迎え開設されました。少子高齢化や生活環境・教育環境の変化等により島内高校への入学希望者は激減し、全校生徒30名ほどまでに減少したため、後々の神津高校の存続が危ぶまれるようになりました。このため神津島村では、平成25年離島振興法の見直しに絡めて、平成24年の神津島村離島振興計画素案に「離島留学制度」を盛り込み、平成27年度より民家にホームステイという形で、男子生徒1名の留学生受け入れを開始しました。

現在は男子寮・女子寮とも完備され、男子7名、女子6名が留学し、高校全

体の生徒数は46名となっています。離島留学希望者は年々増加し、昨年は22名の面接を行い男子3名、女子2名の受入をしました。

離島留学制度の導入により、神津島高校全体が活発になるとともに、全体の学力も目に見えてレベルアップしてきています。今後も神津島を担う有望な人材育成のため支援の継続・充実を図っていきます。

#### 6. 最後に

私たちがこれまでに経験したことのない社会状況の中、全国的に少子高齢化と人口減少が問題となっています。本村も例外ではなく、令和12年には人口1,527人になると推計<sup>\*</sup>されています。人口規模の縮小が予想される中においても、神津島で暮らすことで、私たち一人ひとりが心も身体も健康で豊かに日々を送れるよう、神津島村第5次総合計画では「誰もが健やかで、生き生きと活力のある島づくり」という目標を掲げています。

これを実現するためにも、星空保護区やエコツーリズムの取組を通じて、観光産業の活性化を図り、さらにインフラ整備や社会福祉、防災、教育の充実等に取り組んでまいります。

※国立社会保障・人口問題研究所

東京都神津島村長 前田 弘  
(令和5年12月11日付第3263号)



▲2023-24シーズン開業100年を迎える野沢温泉スキー場

## 通年型マウンテン リゾートへの取組 と ウェルビーイング ビレッジの むらづくり

### 1. 野沢温泉村の概要

長野県野沢温泉村は、長野県の北部、新潟県境に位置し、標高1650mある毛無山の裾野およそ標高600mに温泉街が広がる「スキーと温泉、そして野沢菜の故郷」として、古くから多くの人々に親しまれている湯の里です。

野沢温泉村が「湯山村」として歴史に現れてくるのは、鎌倉時代中期の文永9年（1272年）が最初であり、江戸時代初期にはすでに24軒もの宿屋があったといわれ、古くから温泉地として栄えていた本村は、その後、明治45年（1912年）に飯山中学校の生徒であった村出身者が初めてスキーを

## のざわおんせんむら 長野県 野沢温泉村



滑り、大正12年12月（1923年）には野沢温泉スキー倶楽部が発足、翌13年1月には野沢温泉スキー場が開業、スキー場の開発とスキーヤーの誘致、宣伝により、温泉とスキーを中心としたむらづくりが始まり、来シーズンには野沢温泉スキー場開業100周年を迎えることとなります。

### 2. 悪条件の化学反応↓ スキーによるむらづくり

野沢温泉村は、ひと晩で1mも雪の降る日本有数の豪雪地帯であり、周囲を山々に囲まれ、すり鉢の底に集落があるようなところです。冬期間は半年近く雪に閉ざされるため、以前は「出稼ぎ」に出る人が大半で、かつて雪は暮らしに不便を強いるやっかいなもの



▲100年の年月を経て国内最大級のスノーリゾートに

でありました。  
日本にスキーが入ってきたのが明治44年（1911年）、翌年には野沢温泉にシブールが描かれ、「豪雪」と「急傾斜地の山に囲まれた村」という2つの悪条件が化学反応し、「雪を観光資源にして、スキー産業での発展を」のむらづくりの原点が生まれました。  
大正12年に発足した野沢温泉スキー倶楽部によるスキー場開発は、昭和3年に、現在のミディウムヒル規模のジャンプ台「野沢シャンツェ」が完成、昭和5年には第5回明治神宮スキー大会（現在の国体に相当）の開催と競技スキーの中心地として着実にグレードアップが図られていきました。

その頃すでにスキー場は、スキー倶楽部という住民自らがリフト建設やスキー場経営をするという他に類を見ない40年もの歴史があり、この歴史と伝統を守るべくスキー場の管理経営権を無償で村に移管、スキー場の開発、経営等のハード部門は村が、選手育成や大会開催などのソフト部門はスキー倶楽部が行うという車の両輪の関係が成立し、その後村営スキー場として開発が進められ、ピーク時にはゴンドラリフト2基を含む29基ものリフト・ゴンドラリフトを擁す国内最大級のスノーリゾートとして発展してきました。（現在は指定管理者制度により民営化、土地や施設の保有、施設整備は村が、それを借り受け「株式会社野沢温泉」が

終戦後の昭和25年には、国内で3番目、民間では草津に次いで2番目となるリフトが日影ゲレンデに計画され、小雪の舞う中、200mにもおよぶワイヤーを小学生から大人まで村人総出で運び上げ、12月21日に野沢温泉の第1号リフトが完成、スキー倶楽部が積極的にスキー場経営に乗り出し、昭和38年にスキー場経営を村に移管するまで7つのリフトを建設、スキー場の整備拡充が図られてきました。  
昭和30年代後半になると、高度経済成長によりスキーをレジャーとして楽しむ傾向が強まり、全国各地にスキー場がオープン、野沢温泉にも大手企業等から開発や土地買収の打診が相次ぐようになってきました。



▲野沢温泉学園スキー科の授業風景

運営を行う上下分離方式を採用、リフト・ゴンドラ20基）  
**3. スキー産業を活用した人材育成**  
昭和46年（1971年）、本村と縁の深い故ハルネス・シュナイダーの故郷であるオーストリア・チロル州サンアントン村と姉妹村提携を結び、オーストリア国立スポーツ研究所との技術交流やスキー教師の交換研修、両村中学生や村民の交流を進めてきました。  
そういった成果等もあり、本村には世界的なウインタースポーツ競技大会で上位選手を輩出してきた伝統があります。例えば、本村約3、500人から16人ものオリンピック選手が輩出され、総人口に占めるオリンピック選手

比率は日本一であり、トップのウインタースポーツアスリートを安定的に輩出してきたスポーツ環境は日本屈指のものであります。  
こうした環境を支える人材育成の取組のひとつとして、野沢温泉村では平成25年4月、「幼保小中一貫教育」を行う野沢温泉学園を開園し、地域性を生かした教育活動（英語学習やふるさと学習など6つの柱）として、教育課程特例校の認可を受けたスキーの楽しさを味わう「スキー科の学習」を実施しています。

スキー科は、スキーを村の基幹産業とし、16名のオリンピック選手を輩出している野沢温泉学園ならではの教育課程であり、スキー科として年間30時間、こども園の年長から中学3年生までの10年間、単なるスキー授業ではなく、保護者や地域指導者が一体となった一貫指導体制を整え、学園の全ての子どもが楽しくスキーが滑れ、生涯にわたってスキーやスノーボードに親しむことを目指しております。そして、本村出身者はスキーまたはスノーボード経験者であり、村全体を挙げて未来のウインタースポーツ産業を担う人材育成にも取り組んでおります。

#### 4. スノーリゾートからマウンテンリゾートへ

スポーツを活用したまちづくりを着実に継続して進めていくために、これまで野沢温泉村、(株)野沢温泉（スキー

# 長野県 野沢温泉村

場運営会社）、観光協会、旅館組合、商工会等自治体と民間団体が一体となって実施してきた観光産業の取組を、総合戦略の実施主体、事業の受け皿となるべく、令和5年度中に迅速な意思決定と地域観光の担い手組織となる地域観光DMOを設立し、本村の特色あるスポーツ資源、地理的および自然的特性を活用し、春季から秋季までのマウンテンスポーツ振興、冬季のウィンタースポーツ振興による通年型マウンテンリゾートへの転換、推進が求められています。

温泉はあるものの、冬季に比べ夏季観光の振興は長年の課題となっており、夏季のマウンテンスポーツ振興としては、すでに平成29年に日影ゲレンデにオープンした「野沢温泉スポーツ公園」には、夏でもスキー・スノーボードが楽しめる本物の雪のような次世代スノーマット・ピスラボ仕様のサマーゲレンデ整備や最高時速70mのスカイアクティビティ、ジップ・スカイライド、小さなお子さまも安全に遊べる遊具を備えたナスキーパークを整備し、夏のアクティビティ充実を図り、令和4年度には隣接するインフォメーションセンター内の雨天でも遊べるナスキールームに熱中症対策としてエアコンを設置、雨の日のみならず暑い日も安心して遊べる施設を整備しております。

また、現在継続して整備を進めている毛無山を中心とする「やまびこエリア」には、山麓からのアクセスとして令和2年12月に世界最新鋭の10人乗りのゴンドラリフトを敷設。標高627mの山麓駅から毛無山山頂付近にある標高1、417mの山頂駅までの全長約3・2kmを所要時間8分で移動ができるようになりました。

山頂駅周辺には、季節ごとに楽しめる500種類以上の山野草・高山植物やウッドデッキ付きのテラス等のフラワーガーデン・ロックガーデン等の「上ノ平ピクニックガーデン」を整備し、軽装での散策も可能になっております。

今後の整備計画としては、エリア内にあるスタカ湖キャンプ場についてグランピング等の高付加価値化整備やア



▲全長500mのサマーゲレンデは、夏でも雪に近い感覚でトレーニングできる



▲空中大滑降、標高差122mを一気に滑り降りるジップ・スカイライド



▲標高1400m付近に広がる上ノ平ピクニックガーデン



▲長坂ゴンドラのキャabinは10名定員。マウンテンバイクも2～3台積載可能



▲水上アクティビティが充実してきているキャンプ場は、さらにアクティビティを増やして2年後のリニューアルオープンを目指している



▲初級から上級まで幅広いコース設定がされたマウンテンバイクコース

クティビティの設置、湖を利用してのカヌーやSUP（スタンドアップパドル）などこれまでの登山やハイキングだけではない遊びを提供し、特にこどもやファミリー層でも安全・安心に山で遊べるマウンテンスポーツの振興をめざしております。そして、毛無山頂には遠くは日本海や佐渡島、北アルプスの山脈等360度の大パノラマを望める展望テラス「天空の展望台」建設も計画しております。

これまでのハイカーや登山愛好家のみをターゲットとした散策路の整備に注力してまいりましたが、よりアクティブに活動する客層をターゲットにトレイルランやマウンテンバイクコース等の整備と併せ、令和3年から開催している「野沢温泉自転車祭」のように、山頂から山麓までのマウンテンバイクによるダウンヒルと山麓から山頂へのヒルクライムという全く違う要素の大会をひとつの山で開催できる野沢温泉村の山の魅力も発信しながら、県内外からさまざまなマウンテンスポーツによる誘客と通年雇用の拡大を図りながら移住定住促進にもつなげていきたいと考えています。

冬季は、これまで数多くの国際大会、国内大会の開催ノウハウを生かしながら、令和元年度から11年連続で開催する全国中学校スキー大会や他都府県単位のスキー大会、小学生から大学生までの各種スキー大会、国際大会としては障がい者スポーツのパラスポーツアジア大会や国際スキー連盟公認大会等通年で平均して20回以上のスポーツイベントの開催や各種学習旅行（小学校・中学校・高校等）等、さらに大会等の招致を継続して行うことで、ウインタースポーツ人材の育成、次世代を担う雇用創生も図ってまいります。

## 5. ウェルビーイングブレッジの推進

本村には、これまで述べたスポーツ振興のほかに、温泉やパウダースノーの恵みといった豊富な自然環境、日本三大火祭りのひとつにも挙げられる道祖神祭りや湯沢神社灯ろう祭りといった伝統行事、代表的特産品である野沢

菜漬けなど、村民生活に結びついた地域文化資源があり、スポーツ振興と併せこころした村民文化を未来へと継承していくことが、魅力と特性あふれるむらづくりの根幹を成していると感じております。

最近では、国内外からのIUJターンのような移住者も多くなり、本村の自然環境や水にほれ込んだ移住者によって、クラフトビールやクラフトジン、ウイスキーの醸造所、カフェやレストランなど新たな観光資源、産業も生まれてきています。

温泉街に点在する13カ所ある共同浴場や足湯、そのほかの日本伝統建築と併せ、さまざまな顔を見せる温泉街の街並みがインバウンド観光客にも好評であります。

四季を通じ、住民も観光客も村内の自然、遊び、スポーツ、食事、温泉等により自然と体を動かし、身体的・精神的・社会的に元気になる、「ウェルビーイングブレッジ」の推進に取り組み、中長期滞在による村民との交流やスポーツによるコミュニケーション形成により、第2のふるさととして何度も再訪いただける関係人口、交流人口の増加を進めてまいりたいと考えております。

長野県野沢温泉村 観光産業課  
課長 竹井 勝  
(令和5年5月29日付第3241号)



▲廃業した缶詰工場をリノベーションしオープンした野沢温泉蒸留所



▲日本三大火祭りのひとつ「道祖神祭り」



▲ウミガメ専門の博物館「日和佐うみがめ博物館カレッタ」(町営)で暮らすウミガメ

美波町の概要

“にぎやかそ、  
にぎやかな  
過疎の町

美波町は、平成18年3月31日、日和佐町と由岐町が合併して誕生、徳島県南東部に位置し、県都徳島市へは約50kmの距離にある総面積が140・74km<sup>2</sup>の町です。南東は太平洋を望み、暖かい黒潮の良好な漁場を有しています。海岸部は、アカウミガメの産卵地大浜海岸、田井ノ浜海水浴場の他、千羽海岸、海食洞のえびす洞など多様な岩礁が続く風光明媚なりアス式海岸となっており、「室戸阿南海岸国定公園」に指定されております。町面積の約89%が森林・原野であり、日和佐地区の中央を東西に流れる日和佐川は、蛇行し



▲太平洋を望む美波町日和佐地区市街地

ながら東へ流れ、下流には臨海平地が開け、市街地を形成し地方港の指定を受けた良港“日和佐港”を備え、町の中心部をなしています。代表的な観光資源は、四国八十八箇所霊場二十三番

徳島県 美波町





▲大浜海岸でのアカウミガメ産卵

札所である薬王寺、国の天然記念物アカウミガメの産卵地大浜海岸、日和佐うみがめ博物館カレッタ等があり、年間100万人近い観光客が訪れる、海・山・川といった自然環境と歴史・文化に恵まれた町となっております。

人口は平成18年美波町が誕生した当時は8、848人、高齢化率36・3%でありましたが、令和2年の国勢調査では、6,222人、高齢化率49・4%と少子高齢化が急速に進行しております。

### 人口減少下のまちづくり指針・キャッチフレーズ

高齢化率が45%を越す本町は、今後人口減少局面が続くと予想されております。全国的に人口減少や少子高齢

化が進む厳しい現実の中では、住民票の有無だけにとられないまちづくりが必要と考え取り組んでまいりました。テレビの地上デジタル化に先立ち町中に光ファイバー網を整備したことにより、都市部企業のサテライトオフィス誘致や、学童の多拠点就学を可能とするデュアルスクール制度の実施、また、飲食店などの新規起業支援等を積極的に進めてきた結果、県内最多となるサテライトオフィス進出や、

移住者・関係人口の増加、祭事や防災活動への参加、地域産業との連携創出等、まちには活気や新たな賑わいが見られるようになってきております。こうした流れを加速・拡充させることで、たとえ人口減少と過疎化が進もうとも、活気あふれる賑やかなまちであり続けることを目指し、全国で生き残りをかけた移住者や企業の誘致が行われる中でも選ばれるまちとなるよう、町内外に届くまちづくりの指針・



▶人口減少・過疎化の中でも、活気あふれる賑やかなまちを目指す決意が込められている

キャッチフレーズ「にぎやかなにぎやかな過疎の町 美波町」と定め、町民と行政が一体となったまちづくりを推進しております。

### 美波町とウミガメの物語

日和佐うみがめ博物館カレッタの前には、アカウミガメが上陸産卵することと知られる大浜海岸が広がっております。戦後まもない食糧難の時代に畑として使えないこの海辺に日和佐中学校は建設されました。1950（昭和25）年6月18日、放課後に大浜海岸でソフトボールをしていた生徒達が無残

に殺されたアカウミガメの亡骸を見つけました。駆けつけた先生も驚き、大切にされるべき「海神の使者」を食べるために殺すという行為を大いに憎み、「よっしゃ、いっちゃよわしらでウミガメのことを研究し、こんなむごいことをする人が出てこんように世間に知らしてやらんか！」と生徒と先生は日和佐中学校海亀観察班を発足、ウミガメの調査研究を始めることとなりました。

現在とは違ってインターネットがない時代、ウミガメに関する情報は皆無であり、研究は手探りで行われました。当時の産卵観察記録に記された調



▶1950年に結成された日和佐中学校海亀観察班

◀ 2022年で72歳をむかえた「浜太郎」



査道具は「テント1、懐中電灯1、棒状温度計1、目覚時計1」とあります。目覚時計は時間を記録するために先生が自宅から持参、当時の教員の給与では腕時計を買う余裕がなかったのです。

やがて海亀研究班の研究成果はさまざまな科学賞を受賞するほどに評価され、日和佐の地はウミガメの町として知られるようになり、昭和42年には日本で初めてとなる「ウミガメとその産卵地」が国の天然記念物の指定を受け、昭和60年に世界でも珍しいウミガメ専

◀ 現在の日和佐うみがめ博物館カレッタ



門の博物館「日和佐うみがめ博物館カレッタ」をオープンさせました。海亀研究班が活動当初に孵化させ、飼育してきたとされるアカウミガメ「浜太郎」が、現在も博物館で悠々と泳いでおります。

### 日和佐うみがめ博物館カレッタの全面改修

博物館は建設から40年弱、その間改修を行ってきましたが展示内容も現在の学術研究からみると古く誤ったものもあり外国語対応もできておりません。外国から訪れた方達にはウミガメを狭いスペースで飼育しており、動物虐待のイメージを持たれたこともあり

ました。また体験型観光の考え方がなかった時代に建てられたこともあり、限られたスペースしかなく、さまざまな体験やウミガメとのふれあいをするスペースがありません。

令和2年5月に文化観光推進法が公布、同年11月に同法に基づく拠点計画「美波町回帰率向上拠点計画」が認定、町の文化観光の重要な拠点施設として全面改修を行うこととなりました。完成まで5カ年事業として計画はスタートしました。現況調査、基本計画、基本設計、実施設計と進めるうちに博物館の抱えるさまざまな問題が表面化し、追い打ちをかけるように新型コロナウイルス感染症の拡大、ロシア・ウクライナ問題の影響による資材高騰等、改修事業費の大幅増加により財源の確保に苦しみことになりました。

そこで何とか財源を確保しようと、2つのことにチャレンジしました。

1 つ目は、企業版ふるさと納税です。町がウミガメと共存してきた歴史やSDGsの取組、博物館の改修を周知したところ、共感してくださった企業から5,000万円以上の寄付が集まりました。2 つ目は、クラウドファンディングです。博物館改修を目的としたガバメントクラウドファンディングでは町民や全国の個人、企業から1,300万円を超える寄付が集まりました。多くの寄付が集まったことに驚きと喜



▲全面改修後の施設イメージ。新たなプールはウミガメが快適に過ごせるようアニマルウェルフェアに配慮して設計されている

